

まち歩き講座『土木遺産を訪ねて』の 実践を通して見たインフラツーリズムの可能性

阿部 貴弘¹, 小野田 滋²

¹正会員 日本大学准教授 理工学部まちづくり工学科 (〒101-8308 東京都千代田区神田駿河台1-8-14)
E-mail: abe.takahiro@nihon-u.ac.jp

²正会員 鉄道総合技術研究所 (〒185-8540 東京都国分寺市光町2-8-38)
E-mail: onoda@rtri.or.jp

近年関心の高まるインフラツーリズムは、インフラや土木分野への理解を深めることはもとより、まちに対する理解を深めるとともに、持続的なまちづくりへの展開も期待することができる。その一助となることを目的に、本報告は、これまで4年間にわたり筆者らが取組んできた「まち歩き講座『土木遺産を訪ねて』」について報告するとともに、インフラツーリズムのまちづくりへの展開の可能性について考察するものである。

Key Words : civil engineering heritage, walking tour, infrastructure tourism, heritage tourism, new tourism

1. はじめに

近年、ニューツーリズムの一つとして、インフラを観光対象とするインフラツーリズムへの関心が高まっている^{1), 2)}。たとえば国土交通省では、「インフラツーリズム PORTAL SITE」³⁾を開設し、その推進を支援しているほか、土木学会においても、学会誌で「土木観光」の現在⁴⁾と題する特集を組み、各地の取組みを紹介している。

こうしたインフラツーリズムは、インフラへの理解や土木分野への理解を深めることはもとより、日々の生活を支える身近なインフラを観光対象とすることで、生活の場であるまちに対する理解を深め、ひいては持続的なまちづくりへの展開も期待することができる。しかし、現状のインフラツーリズムは、施設自体の規模の大きさや、普段は見ることができないといっためずらしさを魅力としたいわば逸品豪華主義の側面が強く、身近なインフラ、いわばヴァナキュラーなインフラを対象としたまちづくりへの展開が意識されているとは言い難い。

一方、土木学会選奨土木遺産の認定制度は、土木遺産の顕彰を通じて、歴史的土木構造物の保存に資することを目的としているが、その結果として、歴史的土木構造物のまちづくりへの活用を期待している¹⁾。すなわち、ヘリテージツーリズム（遺産観光）に対する関心の高まりを踏まえれば、身近な土木遺産を観光対象としたインフラツーリズムには、まちづくりへの展開の可能性を期待できると考える。

そこで本報では、インフラツーリズムのまちづくりへの展開の一助となることを目的として、これまでに筆者らが取組んできた「まち歩き講座『土木遺産を訪ねて』」（以下、本講座）について報告する。

2. 本講座の内容

(1) 講座概要

筆者らが講師を務める本講座は、土木遺産の価値に対する社会の理解促進を目的に、土木学会 100 周年事業の一環で、(株) NHK 文化センター（青山教室）が運営する NHK カルチャーの講座の一つとして、2012（平成 24）年 7 月に開講した。東京都内の土木遺産をめぐりながら、講師が現地で解説を行う、おおむね 2 時間のいわゆるまち歩き講座である。これまでの 4 年間で、全 8 回 24 コースの講座を実施した。

講座開講までの経緯や初年度の講座実施概要、さらに受講者アンケート調査結果を踏まえた土木遺産ツアーの課題と可能性については、前報^{5), 6)}において報告した。それらを踏まえ、本報では、全 8 回の講座内容のほか、これまでの受講者数の変遷等について報告するとともに、インフラツーリズムのまちづくりへの展開の可能性について考察する。

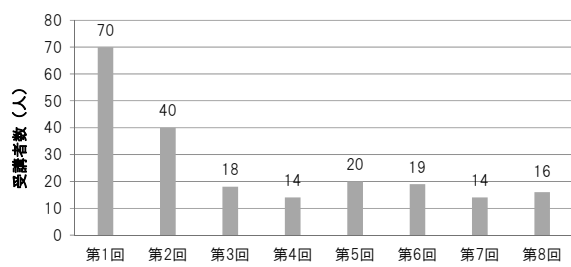


図-1 受講者数の変遷

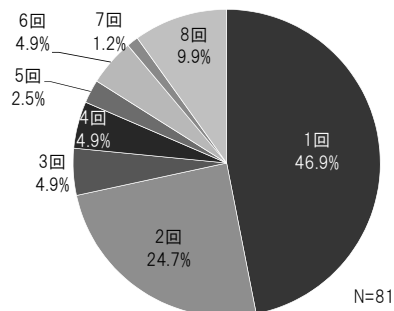


図-2 重複受講回数の割合

(2) 各回の講座内容

2012（平成24）年7月の開講以降、これまでに実施した第1回から第8回の各回の講座内容及び今後実施予定の第9回の講座内容を表-1及び表-2に示す。なお、各回の講師は、筆者らのほか、東京大学大学院の福島秀哉助教が担当している。

本講座は、基本的に各回3コースのまち歩きで構成し、月に一度1コースずつ現地のまち歩きを実施している。講座内容の企画・編集にあたっては、各回とも3コースに共通する全体テーマを設定するとともに、そのテーマに沿って各コースで紹介する土木遺産を複数抽出し、個々の土木遺産に対する理解を深めるだけでなく、それらをめぐり歩くことで、一連の物語として対象地区の成り立ちを学ぶことができるよう配慮している^{5), 6)}。

講座開講初年度にあたる第1回及び第2回の講座では、それぞれ3コースを現地でめぐり歩くのみであったが、2年目の第3回及び第4回では、各コースの詳しい解説を座学で学んだあとに現地をめぐり歩く、つまり座学と現地のまち歩きを交互に実施する形式とした。3年目以降は、オリエンテーションとして3コース全体の詳しい解説をまとめて座学で学んだあとに、現地のまち歩きを3コース続けて実施する形式とし、これが定着している。

なお、これまでの全8回の講座で、すでに東京都内3市12区の土木遺産を訪ねている。

(3) 受講者数の変遷

これまでの全8回の講座の受講者は、のべ211名に達している。各回受講者数の変遷を見ると（図-1）、第1回から第3回にかけて受講者数が大きく減少したが、その後はほぼ横ばいの状況にある。

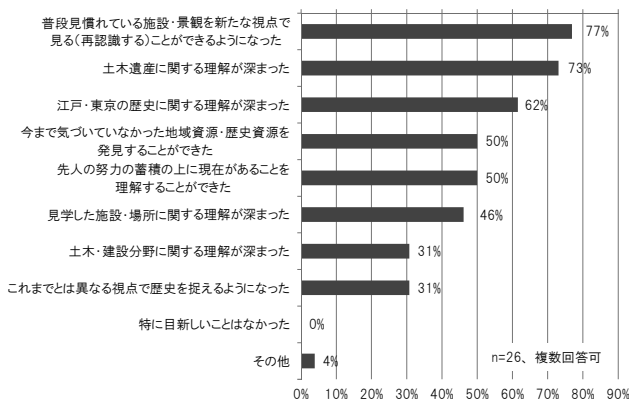


図-3 講座の感想(第2回講座後のアンケート調査結果)⁷⁾

受講者の重複受講回数を見ると（図-2）、1回のみの受講者と、複数回の受講者の割合はほぼ半々で、4回以上受講している受講者は、全体の約4分の1を占めている。全8回すべてを受講している受講者も8名おり、全体の約1割を占めている。

講座の開催回別に見ると、初回の第1回のみ、その後重複受講しない1回だけの受講者が約半数を占めたが、第2回以降は、2回以上の重複受講者がほぼ9割を占めており、リピート率がきわめて高いことがわかる。

3. まとめ

以上の通り、筆者らがこれまで4年間にわたり取り組んできた、まち歩き講座『土木遺産を訪ねて』の内容を取りまとめた。本講座の実施が、そのまままちづくりに直結するものではないが、本講座を通して、インフラツーリズムのまちづくりへの展開に資するいくつかの知見を抽出することができる。

まず、コース設定にあたり、複数の土木遺産の相互関係を読み解く作業は、まさに地区の成り立ちを一連の物語として理解するうえで効果的な作業であり、これはまちづくりの展開に資する有益なプロセスであると考えられる。

また、本講座の受講者には、地元ボランティアガイドを務めている受講者もおり、本講座はガイド養成の役割も果たしていると考えられる。つまり、そうしたガイドが、地元において主体的に講座を企画・運営することで、間接的にまちづくりを支援することになり得ると考える。

さらに、前報⁷⁾で報告したアンケート調査結果（図-3）を援用すると、本講座の参加者は、講座終了後に「普段見慣れている施設・景観を新たな視点で見る（再認識する）ことができたようになった」との感想を持っており、これに受講者のリピート率の高さを加味すると、本講座の内容やコース設定の考え方は、来訪者らの地区への関心や来訪回数（リピート率）の増加、さらに滞在時間の増加を導く可能性があるとする唆することができる。

表-1 講座内容 (第1回～第5回)

講座名・コース名		実施日	対象地・施設	担当者
第1回 「大東京建設の舞台裏」	首都東京は一日にしてならず。現在の東京を築き上げるうえで、大きな転機となった江戸・東京のまちづくりを、土木の視点から見て歩く。東京の基盤を形作った家康の江戸建設。近代国家の礎を築いた明治維新後の近代化。関東大震災からの帝都復興。転機となった江戸・東京のまちづくり全体を俯瞰し、代表的な土木プロジェクトの今を訪ねる。			
	関東大震災と帝都復興 ー東京の礎をつくるー	平成24年7月12日	水天宮前～復興小学校～復興橋梁(清洲橋、永代橋)～濱町公園	福島秀哉
	東京駅と高架鉄道 ー赤煉瓦と赤絨毯ー	平成24年8月9日	東京駅丸の内北口～東京駅～行幸通り～中央郵便局～丸ビル～三菱一号館～有楽町付近	小野田滋
	城下町建設の舞台裏 ー日本橋を歩くー	平成24年9月13日	東京駅日本橋口～道三堀跡～常盤橋～日本橋駿河町～日本橋地下歩道～日本橋室町～日本橋	阿部貴弘
第2回 「江戸城外濠をゆく」	江戸幕府が、一大国家プロジェクト(天下普請)として建設した江戸城外濠。この外濠は、明治以降、埋め立てや鉄道用地への転用など、時代の要請に応じて徐々にその機能を変化させながらも、今なお往時の面影を残す貴重な土木遺産である。この江戸城外濠に着目し、江戸から現代に至るまで、外濠とその周辺に積層する土木遺産の今を訪ねる。			
	四ツ谷駅～市ヶ谷駅 ー外濠と中央線ー	平成24年10月11日	迎賓館前～御所トンネル～四ツ谷駅～四谷見附橋～土木学会～市ヶ谷濠～市ヶ谷見附	小野田滋 阿部貴弘
	飯田橋駅周辺 ー牛込御門と神楽河岸・飯田河岸ー	平成24年11月8日	飯田橋駅西口～牛込停車場入口跡～牛込御門跡～飯田濠(神楽河岸、飯田河岸)跡～小石川橋通架道橋～日本橋川分岐点～飯田町駅跡	阿部貴弘
	御茶ノ水駅～秋葉原駅 ー御茶ノ水駅と御茶ノ水掘割ー	平成24年12月13日	水道橋駅東口～神田上水懸樋跡～御茶ノ水橋～聖橋～昌平橋～万世橋	小野田滋 福島秀哉 阿部貴弘
第3回 「江戸・東京のウォーターフロント隅田川をゆく」	かつては大川と呼ばれ、武蔵国と下総国の国境でもあった隅田川。この隅田川は、江戸・東京の発展を支える交通・物流の大動脈として、長くその役割を担ってきた。まさに隅田川そのものが、一大土木遺産であるともいえよう。こうした江戸・東京のウォーターフロント隅田川と、その沿川に今も残る数々の土木遺産を訪ねる。			
	築地界隈	平成25年4月11日(座学) 平成25年5月9日(現地)	築地～勝鬨～月島周辺	阿部貴弘 福島秀哉
	浅草界隈	平成25年6月13日(座学) 平成25年7月11日(現地)	浅草～押上周辺	阿部貴弘 福島秀哉
	両国界隈	平成25年8月8日(座学) 平成25年9月12日(現地)	両国～浅草橋～秋葉原	小野田滋
第4回 「街道とインフラ 江戸四宿をゆく」	江戸時代、国土の骨格をなす幹線道路として、日本橋を起点とする五街道が整えられた。これらの街道は、現在でも私たちの暮らしを支え続けている。さらに、五街道の整備とあわせて、街道沿いには宿場が整備された。そのうち、各街道の最も江戸に近い宿場を総称して「江戸四宿」と呼ぶ。こうした江戸四宿のうち、甲州街道「内藤新宿」と、東海道「品川宿」を取り上げ、近世から現在まで、街道とその周辺に積層する交通の要衝ならではの土木遺産を訪ねる。			
	内藤新宿(その1) ー新宿駅西口周辺ー	平成25年10月10日(座学) 平成25年11月14日(現地)	新宿駅西口周辺	福島秀哉
	内藤新宿(その2) ー四谷大木戸～新宿駅東口ー	平成25年12月12日(座学) 平成26年1月9日(現地)	四谷大木戸～新宿駅東口	阿部貴弘
	品川宿	平成26年2月13日(座学) 平成26年3月13日(現地)	品川駅～北品川駅～新馬場駅	小野田滋
第5回 「東京オリンピックとその時代」	2020年の東京オリンピック開催が決定し、湾岸エリアを中心として、都内各地でオリンピック開催に向けた関連施設整備が進められつつある。このオリンピックに先立つ1964年にも、東京でオリンピックが開催された。その関連施設は、現在でも現役で私たちの暮らしを支えている。2020年東京オリンピックとその後を見つめる視座を得ることを目的として、1964年東京オリンピック関連施設の建設経緯とその後の変遷、そして今を訪ねる。			
	オリエンテーション	平成26年5月21日	講座全体の概説(座学)	阿部貴弘
	渋谷駅前広場と代々木公園 ー戦後の渋谷開発と代々木公園ー	平成26年6月18日	渋谷駅～国立代々木競技場～代々木公園	小野田滋
	駒沢公園 ー駒沢公園の成り立ちー	平成26年7月16日	駒沢公園	阿部貴弘
	明治神宮外苑 ー国立競技場他施設と外苑の成り立ちー	平成26年8月20日	神宮外苑	福島秀哉

表-2 講座内容 (第6回～第9回)

講座名・コース名		実施日	対象地・施設	担当者
線沿線の土木遺産をゆく	第6回 『中央線・青梅線沿線の土木遺産をゆく』	1889 (明治 22) 年に新宿～立川間で開業した甲武鉄道を前身とする中央線は、特に関東大震災後、東京郊外の発展に大きく貢献してきた。そうした中央線沿線には、都市開発に関わる施設を中心に、様々な土木遺産が息づいている。そうした東京の郊外化を支えた中央・青梅線沿線の土木遺産を訪ねる。		
	オリエンテーション	平成 26 年 10 月 15 日	講座全体の概説 (座学)	阿部貴弘
	青梅線 二俣尾駅および軍畑駅周辺	平成 26 年 11 月 19 日	軍畑駅～奥沢橋梁～二俣尾駅～奥多摩橋～多摩川河川敷 (聖牛)	阿部貴弘
	国立駅周辺	平成 26 年 12 月 17 日	国立駅～谷保駅	福島秀哉
	国分寺駅周辺	平成 27 年 1 月 21 日	国分寺駅～西国分寺駅	小野田滋
鉄「日本鉄道」沿線の土木遺産をゆく	第7回 『日本最初の私鉄沿線の土木遺産をゆく』	1883 (明治 16) 年に開業した日本最初の私鉄である「日本鉄道」は、その後国有化され、現在は JR 東日本の基幹路線として受け継がれている。中山道、奥州街道、日光街道、水戸街道といった、近世以来の街道に寄り添いつつ走る「日本鉄道」沿線には、近世から近代にかけて蓄積された土木遺産が集積している。そうした現在に受け継がれる日本鉄道の遺産をはじめとして、沿線に集積する土木遺産を訪ねる。		
	オリエンテーション	平成 27 年 5 月 20 日	講座全体の概説 (座学)	阿部貴弘
	上野駅周辺	平成 27 年 6 月 17 日	上野駅周辺	福島秀哉
	南千住～北千住駅周辺	平成 27 年 7 月 15 日	南千住駅～北千住駅	阿部貴弘
	田端駅周辺	平成 27 年 8 月 19 日	田端駅周辺	小野田滋
第8回 『江戸・東京の中枢を支える土木遺産をゆく』	第8回 『江戸・東京の中枢を支える土木遺産をゆく』	東京駅とその周辺は、開幕以来 400 年以上にわたり、江戸・東京の政治・経済の中心地としての役割を果たしてきた。日比谷入江と呼ばれる入江が入り込む低湿地であったこの地では、各時代の技術者がその英知を結集して、首都の中枢としての役割を果たすため、日比谷入江の埋め立てに始まり、常に一流の土木施設を築き続けてきた。そうした江戸・東京の中枢を支え続けてきた様々な土木遺産を訪ねる。		
	オリエンテーション	平成 27 年 10 月 21 日	講座全体の概説 (座学)	阿部貴弘
	霞が関と日比谷公園	平成 27 年 11 月 18 日	国会議事堂～霞が関官庁街～日比谷公園	福島秀哉
	日本橋川沿川	平成 27 年 12 月 16 日	日本橋～常磐橋～大手町再開発地区～神田橋～一ツ橋～組橋～アイガーデンエア～小石川橋	阿部貴弘
	東京駅と丸の内	平成 28 年 1 月 20 日	東京駅を中心とした鉄道施設、日比谷～丸の内～大手町のオフィス街、太田門三頭碑など	小野田滋
第9回 (予定) 『本所・深川の土木遺産をゆく』	第9回 (予定) 『本所・深川の土木遺産をゆく』	小名木川の開削に始まる「本所・深川」地区は、明暦の大火以降、その開発が本格化する。掘割運河の開削により、舟運路を確保し、さらに埋め立てにより市街地を拡大してきた。掘割運河沿いには、橋梁をはじめ水とともに暮らすための土木遺産が数多く遺され、また市街地には、江戸以来の倉庫街が広がり、さらに武家屋敷の名残をとどめる庭園や神社仏閣などの文化資源にも恵まれている。そうした本所・深川地区の発展を支え続けてきた様々な土木遺産を訪ねる。		
	オリエンテーション	平成 28 年 5 月 18 日	講座全体の概説 (座学)	阿部貴弘
	森下～住吉	平成 28 年 6 月 15 日	小名木川橋梁群と沿川の土木遺産	福島秀哉
	門前仲町～清澄	平成 28 年 7 月 20 日	門前仲町駅→富岡八幡宮→八幡橋 (旧弾正橋) →仙台東川→亀久橋→清澄庭園→清澄白河駅	阿部貴弘
	両国～清澄	平成 28 年 9 月 21 日	両国駅→隅田川橋梁→万年橋→高橋→小名木川→清洲橋→セメント工場発祥地	小野田滋

以上に取りまとめた知見が、今後のインフラツーリズムのまちづくりへの展開の一助となれば幸いである。

謝辞:『土木遺産を訪ねて』の企画及び運営の全般にわたり多大なご協力をいただいた株式会社NHK文化センター東京本部の皆様、に、厚く御礼申し上げます。

注

- [1] 土木学会選奨土木遺産の活用状況については、別稿にて報告予定である。

参考文献

- 1) 国土交通省観光庁編：平成 26 年版 観光白書，p87，昭和情報プロセス，2014

- 2) 国土交通省観光庁編：平成 27 年版 観光白書，p97，p139，日経印刷，2015
- 3) 国土交通省：インフラツーリズム PORTAL SITE，
<http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/infratourism/index.html>
- 4) 土木学会：土木学会誌 vol.99 No.6，2014
- 5) 阿部貴弘・小野田滋他：土木学会 100 周年事業『土木遺産を訪ねて』の実践を通して見た土木遺産ツアーの課題と可能性，土木史研究講演集 vol.33，pp.243-250，土木学会，2013
- 6) 阿部貴弘：土木人のための土木観光論—実践。土木遺産ツアーの舞台裏—，土木学会誌 vol.99 No.6，pp.16-19，土木学会，2014
- 7) 阿部貴弘：土木人のための土木観光論—実践。土木遺産ツアーの舞台裏—，土木学会誌 vol.99 No.6，pp.19，土木学会，2014

(2016. 4. 11 受付)